

果敢なる言葉の模索

鈴木 竹志

かつて手に入れた真鍋美恵子の二冊の歌集が書架の隅にあるのを見つけた。手には入れたものの、読まずにいたので、そのうちの第二歌集『朱夏』の頁を繰ってみた。すぐに次に挙げるような歌を見つけて驚いた。

ビルディングの大き鉄戸が加速度を抑制しつつ降るその音

フルスピードのジープの隊がわが前を過ぐる時鉄の匂ひ憎めり

アスファルトの亀裂にひびきジェット機の急降下音瞬間に過ぐ

一読して分かるこれらの歌の特徴は、外来語や漢語の多用である。作者名を出さなければ、男性歌人の歌と見なされても不思議ではない。また、一見、時代的には昭和三十年代から四十年代の歌のように見える。実際には、『朱夏』の刊行は、昭和二十九年二月である。とすると、これらの歌が詠まれたのは、昭和二十年代後半ということになる。真鍋は一九〇六年生まれであるから、これらを詠んだのは四十年代半ば以降であろう。昭和二十年代に活躍した女性歌人を挙げるとになると、葛原

妙子、中城ふみ子の名前はすぐに挙がるが、真鍋の名前は挙がらない。ある時期以降は忘れ去られたようだ。しかし、『朱夏』を読んでも、私は、真鍋美恵子という歌人は、再評価されるべき歌人の一人だと断言したい。その一番の理由は、時代を反映する言葉を果敢に取り入れて、その時代をより鮮明に描こうとする作家精神の存在である。そういう観点からすると、後半にある「弧線」と題する一連の歌は実に魅力的である。

ふたたび時雨過ぎたり時計塔修理足場の丸木濡れつつ

陸橋の長き弧線が暮れてゆく窓の前景をたしかに支ふ

アドバルーンの不透明体が浮ぶ空解決のなきままに暮れゆく

起重機が石材をつかみてはあがる反復を見てをり昏るる路上に

これらの歌を読んでゆくと、真鍋が詠み始めたのは、戦後の復興してゆく都市のありさまではなかったかと思う。戦前の短歌と同じ手法では決して表現できないと自覚したう

えで、戦後の日本の都市とその生活を何とかして描きたいという強い意志の下に、真鍋は冒険的とも思われる大胆な作風を作り出したといったのである。ただ、そのために抒情性に若干に欠ける面があったことは否めない。

『現代短歌大事典』では、「作風」の項の結語として、執筆者の河野裕子は、次のように記している。

戦後の女歌が、新しい境地を求めて模索し、変化する中で、美恵子は登場した。心情表白ではなく、対象をシャープに切り取ることによって、人間の本质に迫ろうとした。評論や歌壇に向けての発言は少ないが、戦後屈指の実力派歌人である。

この河野の「戦後屈指の実力派歌人」という指摘は、今回初めて丁寧に真鍋の歌を読んだ私には十分説得力がある。今読み返すべき歌人の一人であることを改めて確認することができた。

さて、現代の女性歌人の歌には、現代を描くために真鍋が見せたような、言葉に対する果敢なる意志は果たして見られるだろうか。この問いかけに十分応えることのできる歌を讀んでみたいという思いが増してきた。ここ暫くこの観点で女性歌人の歌を讀んでゆきたい。